2023・2号

直江の津

◉上越なおえつ信金倶楽部◉

52号

2023・7-2023・12

◉特集◉

海は優しいが恐ろしい。恐ろしいが優しい。

◆長野県上伊那郡中箕輪国民學校直江津遭難事件◆

◉特集◉

「斜めの家」を理解せずに、上越の建築文化を語るなかれ

―上越出身の世界的建築家 渡邊洋治生誕一〇〇周年記念―

巻頭エッセイ◉わたしの直江津

雨の国分寺にて

工藤弘美

頸城の空間を駆ける 国府―春日山―府中―直江津へ

地下四mの縄文遺跡

―四〇〇〇年前の土地選択―

歴史は「今日」への手紙

古絵はがきから見えるもの

雨の国分寺にて

工藤弘美

五智、国分寺の境内には昔、多いときには六軒もの茶店があったと聞いている。宗教施設として大切な場所であったのは言うまでもないことだが、観光地としても相当な集客力のある場所だったということだ。

二〇二一年の四月より、五智商店会のお許しを得て、今は一軒だけある、茶店を引き継ぎ、カフェを開いた。コロナ禍で、参拝客は極端に少なく、天気の悪い日などは尚更のこと、誰も来ない日も多かったが、それでも国分寺参拝のお客様や、直江津に観光に来られた方々にせめてお茶を飲んでゆっくりできる場所を提供したいと思った。

私自身の先祖の墓が目の前に二つある。父方の祖父、祖母のものと、祖母の父の代々のものと。それで幼少より、国分寺にお参りに来ることは少なくなく、お盆などは、お墓に花を供え、墓石に水をかけてお参りのあと、当時二軒あったどちらかの茶店でかき氷を買ってもらうのを楽しみにしていた気がする。大人たちはところてんを頼んだのだろう。

名物のところてんはいつからやっているのだろう。

いまでも、参拝のお客様は、国分寺にきたらところてんを食べないと物足りないと感じる方が多いことを知り、自分の店でも夏の間はところてんを続けてみることにした。

先日、外国人の団体ツアーが連日来て、ところてんの説明を受けていたが、なんなら、ところてんを食べるというアクティビティーを予定に組み込んだらきっと喜ばれると思う。

多分、日本の、ここでしか食べられない名物と言うことになると思うので。カロリーもなく、夕食にもつっかえないので、おやつに最適だ。

五智は自然が豊かで、心からほっとできる場所が多い。国分寺境内もそのひとつで、いつでもよい気がながれていて、心を洗われる。ぱったりと人が来なくなる今日みたいな雨の日が、本当は一番心地よかったり

する。

ところで、直江津の駅前商店街には、美味しい老舗のお菓子屋さんが多いが、昔、国分寺参拝のお客様がたくさんいたために、それらのお店が繁盛していたと、継続団子で有名な、みのやさんの店主にうかがい、少し驚いた。ちなみに今年、継続団子は一二〇周年らしい。

国分寺への参拝とともに歴史ある甘味も若い世代に受け継がれていくと良いなと思った。

そういえば、最近意外と若い夫婦などが参拝に訪れることが多い。心の時代ということだろうか？　人の心が神仏に否応なしに向かう三年間だった？

余談だが、最近の若い僧侶の中には、音楽やダンスを絡めて仏教やらをユーチューブで、かっこよく発信している人が結構いることを知り、みんなが楽しいと思う形で世界を照らしていて素敵だなあ、と思った。そんな流れが加速して人心を豊かにし、世界平和をもたらすような結果に結びついていくことを心から願う。

国分寺は、一九八八年、本堂が焼失する前は怖い闇魔さんがいたり、水子供養のお人形がたくさんまつられていたりして、子供心に異世界を感じる、そんな場所でもあった。境内の池には蓮の花がたくさん咲いていた。

国分寺に再びたくさんの人が参拝に来るようになりますように。



くどうひろみさん
一九六六年生まれ。直江津南小学校・直江津中学・直江高校を卒業。
現在は国分寺のカフェで、小さなパーティーを開いたり、企画したり、地元のアーチストの作品展示をさせてもらったりしながら国分寺の再びの賑わいと、直江津の賑わい創出について考えている工藤さん。

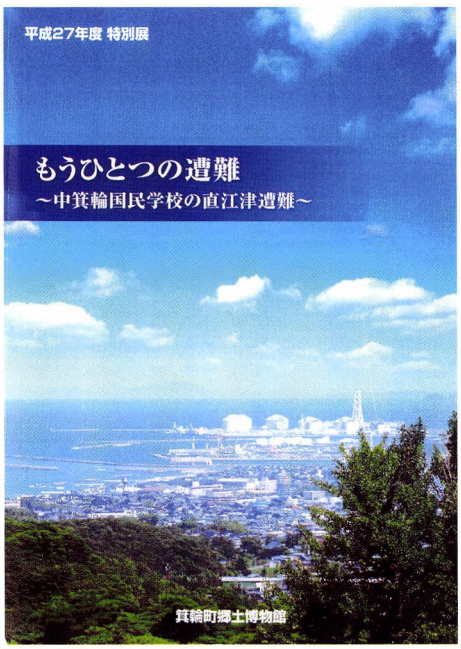
海は優しいが恐ろしい。恐ろしいが優しい。

◆長野県上伊那郡中箕輪国民學校直江津遭難事件◆

平成二七年一〇月、長野県上伊那郡箕輪町（みのわまち）の箕輪町郷土博物館において「もうひとつの遭難～中箕輪国民学校の直江津遭難～」と題した特別展が行われ、春日山山頂から見た直江津海岸を表紙にした図録が発行されました。

表題の「もうひとつの遭難」とは、一つの学校で二度にわたる遭難事件を起こしたことによるものです。

一つ目は大正二年八月、中箕輪高等小学校が木曽駒ヶ岳を登山中、当時予測不可能な突然の気象異変により引率者を含め三八人が遭難、一一名の死亡者を出す事件がありました。この遭難事件は新田次郎の「聖職の碑」によって世に出ることになり、森谷司郎監督、鶴田浩二・三浦友和・大竹しのぶ等の出演で映画化されています。



特別展の表紙　春日山山頂から撮影されている（蓑輪町ホームページより）

二つ目の「もうひとつの遭難」は、昭和一七年九月一三日、修学旅行中の中箕輪国民学校初等科六年生が直江津海岸の突堤上で大波にさらわれて五名が犠牲になったという事件です。現箕輪町立箕輪中部小学校ではこの日を慰霊の日として、今も慰霊碑に拝礼しているということです。

令和四年、同小学校では創立一五〇周年にあたって、慰霊を兼ねて直江津方面への就学旅行を計画し、それに先立って旅行会社が事件の情報を収集していたようですが、現場の直江津では何事もなかったかのように、事件について伝えられてこなかったため、詳しい情報提供に至らなかったようです。

その後、右の遭難事件について筆者に問い合わせがあり、直江津の旧商家「角新（つのしん）」の角澤さんから「信州から修学旅行に来た小学生の一人が波にさらわれて死んだことがあった。後に婦人会でその小学校の慰霊碑に詣でた」という話や「直江津国民学校独自で神式の慰霊祭を行った記憶がある」という話を聞いた覚えがあって、調べて

いるうちインターネット上に公開されている先の特別展の図録を閲覧して事件の概要を知ることになりました。

この事件について昭和二八年発行の「直江津町史」にも当然ながら記載はなく、上越市公文書センターに依頼して、センター所蔵の直江津町政に関する資料や当時の直江津国民学校の資料を調べてもらったが事件についての手がかりをつかむことができませんでした。

そのなかで、上越市立図書館所蔵の「上越新聞」（昭和一五年、戦時統制で高田新聞・高田日報が合併）に、事件を伝える詳細な記事がありました。

中箕輪国民学校の修学旅行は初等科六年生を二班に分け、一班は昭和一七年九月一二日・一三日、二班は一三日・一四日の予定で行われました。

これから修学旅行に向かう二班と、無事修学旅行終え帰途に就く一班を乗せた直江津発の列車が、一〇時二四分、脇野田駅ですれ違い、お互いに手を振り合ったといいます。二班の一五四名は春日山駅で下車、第一七回謙信公祭で賑わう春日山城跡へ登り、林泉寺、五智国分寺、水族館、宿泊地のつたや旅館へと向かいました。

つたや旅館に着くと、「今日は波が高いから明日にしなさい」という地元の人たちの言葉にも、初めて見る海の誘惑に勝てなかったのか、午後四時三〇分ころから子どもたちが海岸に出始め、そして「もうひとつの遭難」が起きることになりました。

＊謙信公祭　大正一五年、高田市長川合直次の主唱で高田市・直江津町・春日村の青年団が中心となって発足。奉納武道大会や時局演説会が行われた。

＊水族館　能生町の滝栄六によって昭和九年、八坂神社境内に開館、昭和一一年五智国分寺裏に移転。

事件を知らせる新聞に掲載されている広告には「国民學校の海の生物観察には」というキャッチコピーがある。

以下「上越新聞」の記事によってたどってみます。（旧漢字・旧かなは、新漢字・新かなに改め、適宜句読点を付し、数字などは本誌の表記に改めた）。

事件現場となった荒川（関川）左岸の突堤や諏訪区は、昭和三四年の河口分離やその後の関川改修工事によって消滅していることを念頭に置いてお読みください。

昭和一七年九月一五日付

海知らぬ子供
哀れ五名浪に呑まる
直江津港突堤上の椿事

一三日午後六時ころ直江津港西側突堤で長野県上伊那郡中箕輪国民学校児童二〇数名が遊戯中激浪に呑まれ二〇名は救助されたが五名が行方不明となった事件あり。急報に依り、直江津署では水難救護所と協力し義勇丸、出動せしめて捜査につとめたが泥土交じりの怒涛と夜に入ったため発見に至らず引き上げ、一四日は午前四時から再び義勇丸が出動捜査中である。

この日、前記中箕輪国民学校では鍛錬旅行のため初等科六年生男子七九名女子七五名計一五四名が、受持ち訓導土屋州造（四一）、瀧沢和平（三一）、村上甲子男（一九）三氏に引率されて、午前四時四二分伊那電鉄松島駅を出発、一〇時一三分（三七分）春日山駅着下車し、折柄、謙信公祭で賑わう春日山に登って、林泉寺に詣で更に五智国分寺に参詣。水族館を見学。午後四時二〇分、直江津町つたや旅館に着き、旅装を解くや海の無い山国の子



上 突堤で遊ぶ子どもたち（昭和３０年代撮影）

左 事件現場周辺

供達とて、早速港の見物に出かけたのであった。

しかし浪が荒く危険なので、付添いの教師達が注意して一旦引き揚げた後で、三〇余名の一隊が突堤に現れて遊び戯れているうちに、逆巻く激浪が押寄せてきたのを不慣れな児童達はこれを避けんとした際、たちまち二〇数名が呑まれてしまった。時ならぬ叫喚に、折柄付近で釣り中の直江津町諏訪区洋服仕立て業柴清一君が夢中で飛び込み、一人、二人、三人と約二〇人まで救ったが、一人では力およばず遂に左記五名は行方不明になったのである。

平松訓章（一三）大槻良平（一三）小野（大和）茂雄（一三）三沢英行（一三）泉沢利典（一三）。

＊昭和一六年、修学旅行は軍事教練の一環として鍛錬旅行と名称が変わった。

約二〇名の命救う
殊勲の太公望柴清一さん語る

激浪に呑まれた二〇数名の児童を救うべく奮闘二〇名の命を救った殊勲の太公望直江津町諏訪区洋服仕立て業柴清一（四七）さんは語る。

「どんな日でも私が突堤に行かない日はありません。今日も午後五時に家を出て突堤で竿を垂れていると、先生が先になって児童大勢とともに突堤に来たので、危険だから突堤に来ないように注意したところ、一同、そこを去ったが、間もなく三〇名近くの児童が来たと思う間に「呀（あ）ッ」と叫ぶ声とともに黒い顔が数知れないほど浮いているので、夢中で飛び込み救い上げたが、その数は後で考えて見ると二一名でした。そのうちに自分も疲れてへとへとになって這い上がったようなわけです。

飛び込んだのは私一人で、突堤の上で引き上げる役を

してくれた人は、高田に来た東京の人達であったとのことでした。東京の人では飛び込めるわけはありません。私の他に今一人飛び込んでくれる者がいたら、五人の犠牲者を出さずに済んだものを……と残念でたまりません」

申し訳ない次第
信州中箕輪国民学校校長
来直して語る

児童五名溺死事件に引率の教師三名はいずれも責任感から徹夜で善後策を講じ、また級友達が悲嘆に暮れるありさまは傍の見るも眼も気の毒なくらいであったが、急報により中箕輪国民学校校長牛沢博美（うつみ）氏が職員三名及び遭難児童の父兄同道、一四日午前四時半来町、直ちに旅館に入ったが、同校長は悲痛な面持ちで語る。

全く申し訳ないことを仕出かしました。御地をお騒がせして申し訳ありません。私の学校は生徒が多く六年生を二班に分けて、一班は昨日の内に帰校しましたので喜んでいたところ、間もなくこの悲報に接して驚愕いたしました。

残った生徒は午前一〇時〇八分の列車で帰校致させますが、私は一部の職員と居残って五名の死体が発見されるまで滞在させていただきます。発見の上はお骨にして帰るつもりです。



救助した柴さん
「上越新聞」より

一旦操作打ち切り

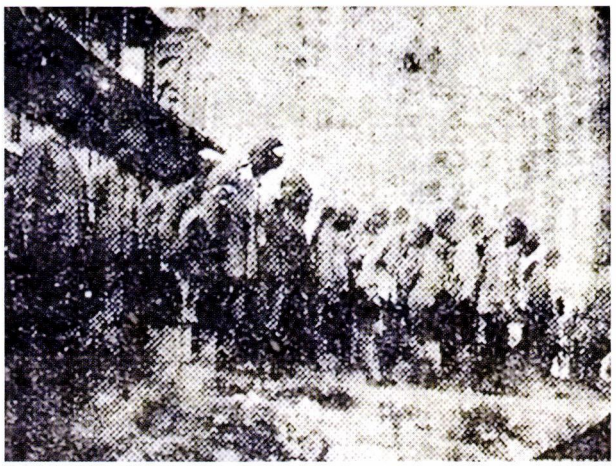
遭難児童五名の溺死体は義勇丸の捜査もむなしく発見に至らないが一四日午前九時一旦操作を打ち切った。

遭難現場で亡き旧友の霊に黙祷
直江津突堤悲劇速報

〔夕刊所報〕（前日の夕刊掲載分）直江津突堤に起こった悲劇―長野県中箕輪国民学校生徒溺死事件は、その後捜査の結果、海に憧れる山国の子供達の欲望が如何に熾烈であったかが窺われ、生命の危険を冒してまでも一刻も早く見たいと焦慮した童心の可愛らしさにホロリとさせられるものがある。

すなわち旅装を解いて間もなく教師三名に引率された生徒達が突堤に来かかるや釣竿を垂れている柴清一（四七）さんに危険だから帰れと注意され、教師達が生徒をなだめて引き揚げるべく一旦、踵を返したのであったが、今日の日を指折り数えて〝海〟への憧憬を燃やしていた山の子供達はどうしてもあきらめきれず「先生、是非是非」とせがむので、抑えきれなくなり、「では、危険だから浪の打ち寄せる所へは行かぬように……前へは出ないように……」と充分に注意を与え、三組（担任土屋訓導）、四組（同滝沢訓導）、一組（同村上訓導）の順で突堤の付け根近で見物すべく歩み返してきた。ところが一番後ろの一組の生徒が早く見たいの一念から約半数程が教師の制止を聞かずに走り出し前方の二た組を追い抜いて突堤の上に現れたので、驚愕した村上訓導は大声をあげて生徒を追ったが、時すでに遅く瞬時にして激浪を頭から浴びた二十数名が海中に押し流されたのであった。

これを目撃した柴さんが釣り竿を放って飛び込み、手当たり次第に岸へ引き寄せれば、折柄居合わせた同町荻



つたや旅館を背に黙祷する児童「上越新聞」より

原徳治（六〇）外二名が突堤の上に引っ張り上げる役を受け持ち、失神せんばかりに驚愕した訓導も駆けつけて手伝ったが力及ばず、既報の五名は哀れ姿を失ってしまったのである。

尚、級友五名の犠牲を出して傷心の旅行隊は、夕刊所報の如く一四日午前一〇時八分発の列車で帰途に就いたが、帰町に当たり遭難現場に於いて心から亡き級友の霊に黙祷をささげた。

人命救助〝殊勲甲〟
柴さん等の表彰方申請

激浪に呑まれた児童二一名を救助した〝殊勲甲〟柴清一さんに助力した直江津町諏訪区荻原徳治（六〇）と高田市の親戚へ遊びに来ていた東京市鎌田区（大田区）蒲田三町目一五八の有馬義雄（二七）、同友人小林則男（二七）両君と判明。直江津署では柴さんとも四名を人命救助の廉で表彰方を知事に申請した。（表彰があったかは不明）

九月一六日付け
二死体発見さる
今日とりあえず荼毘に付し
残死体捜査に懸命

一三日夕刻直江津港突堤に於いて激浪に呑まれ行方不明となっていた長野県中箕輪国民学校生徒五名の死体は直江津水難救護所が義勇丸を出動せしめて捜査に努めたほか地元片原区（天王町）、諏訪両区の隣組も出動して一五日終日捜査したが、空しく午後六時、一旦捜査を打ち切り、牛沢校長始め職員及び父兄達は淋しく宿に引き揚げたが、同夜八時半頃、同町片原町山崎屋旅館下の岸に一名の死体が漂着した。右は五名の中の一人、利治さん長男大和茂雄（小野茂雄）（一三）君で、直ちに納棺して新川端区（実際は川端区＝荒川町）聴信寺に安置、しめやかな通夜が営まれた。続いて十六日午前八時頃、中頸城郡春日村五智居多浜海岸（当時は春日村）に近次郎さん長男泉沢（一三）君の死体が漂着したので同様納棺して聴信寺に安置し正午とりあえず二名の死体を荼毘に付した。

視学官、村長等
各方面へ歴訪、謝意を表す

松岡長野県視学官は一四日夕刻直江津町に至り、一五日関係各方面を歴訪し謝意を表した。

遭難学童を出した長野県上箕輪村村長大槻茂氏は、収入役柴幸恒、村議中坪包人、学務委員代表柄沢関太郎等とともに一四日夕刻来町し、水難救護所、町役場、警察署等を訪問し、捜査に尽力して貰ったことに対する深甚

なる謝意を述べた。

九月一六日

会葬者の涙を絞る　きのう死体三児の葬儀

〔夕刊所報〕（一五日夕刊）遭難した長野県中箕輪国民学校児童の死体は一五日午前八時までに二死体が漂着したが、九時三〇分頃直江津港沖に漂流しているのを水上署の死体捜査の双眼鏡に映じたので、捜査に出動中の義勇丸と連絡して引き上げたが、これは大槻良平（一三）君の死体と判明。三死体を納棺して同町新川端区聴信寺に安置したが、残る二死体は未だ発見されていないので、午後二時同寺に於いて三体の葬儀を聴信寺住職が導師となって執行して火葬したが、つたや旅館、地元片原町、諏訪区民の会葬あった。遭難児童の父兄、殊に牛沢校長、職員関係者等の胸中を思い会葬一同泣かざるものはなかった。

五児童の慰霊祭　各宗協会、直江津国民学校共催

直江津町国民学校、各宗協会共催で、一三日直江津海岸で不幸遭難した五児童の慰霊祭を一五日午後七時から聴信寺に於いて荘厳裡に執行したが、町有志多数列席盛儀を極めた。

＊各宗協会　直江津では宗派の垣根を越えた団体があった。

九月一七日

遭難児童慰霊祭　海は優しいが恐ろしい　聞くだに胸がつぶれる　直江津校代表の弔辞

直江津国民学校、各宗協会共催で突堤上で遭難した長野県上伊那郡中箕輪国民学校五児童の慰霊祭は、一五日午後七時から同町新川端町聴信寺に於いて地元古川町長、鷲頭国民学校長、藤崎署長、岩崎収入役、小出海保水難救護所役員、土肥学務委員長、救助した柴、荻原氏外有志、直江津国民学校初等科六年生全児童が出席。定刻五人の霊を祭り一〇数名の僧侶により読経を奉げ、古川町長の弔辞、箕輪大槻村長、牛沢国民学校長、遭難父兄関係者の焼香、地元有力者の焼香ありて、初等科六年代表高橋勇壹（ゆういち）君は左の弔辞を朗読したが、一同ホロリとさせられて、午後八時閉式した。

（新聞に掲載されたものは、箕輪郷土博物館所蔵の原文と前後を多少入れ替えている）

九月一三日、あゝ、この日、僕等にもわすれられぬ悲しい日になってしまいました。丁度、謙信公祭でしたので、僕等は朝から春日山へ行軍しました。往復の途中や頂で長野県のお友達が嬉しそうに直江津目指して行軍しておられるのに会いました。今にして考えれば、皆様にもどこかでお会いしていたのではないでしょうか。

夕方でした。長野県の子供が波にさらわれたと表を通る人の声に、僕は思わず顔色を変えて飛び出しました。海へ出て見ると突堤の方に人が黒山をなしていました。お聞きすれば、不意に来た大波に二六名もさらわれ、二一名は幸いにも救助されたが、悲しいことに五名の方々が遂に行方不明になられたとの事でした。磯波は憎らしくも荒れ狂っておりました。

元気で喜んで来られたであろうに。悲しきお姿になられた僕等のお友達、泉沢、小野、平松、三沢、大槻君の

御霊に謹んでお弔いの詞を申し上げます。

毎日毎日、海を見て暮らしている僕等でさえ、海ほど嬉しいものはありません。静かなる海、爽快なる夏の海。しかし一度、怒り怒涛渦巻く時は、海ほど恐ろしいものはないと思います。海は優しいが恐ろしい。しかし海を恐れてはならぬ。海を愛しよく知らねばならぬと聞いております。

僕等でさえ海が懐かしいのに、まして山に囲まれている長野県の皆様はどんなにか海に憧れていらっしゃったでしょう。今年は夏以来本当に沢山の国民学校のお友達が直江津の海辺、突堤に嬉しそうに飛び回っておられる姿を見たものでした。

こうなろうとは少しも思わずに海に喜び浪に戯れていられたのでしょうに。先生方やお友達の様子を見ると、お気の毒で仕方ありませんでした。夕方になったので、早く助かって下さるようにとお祈りして帰りました。しかし残念なことに五人の方々はとうとう悲しいお姿になられ、今日、慰霊祭が執行されました。

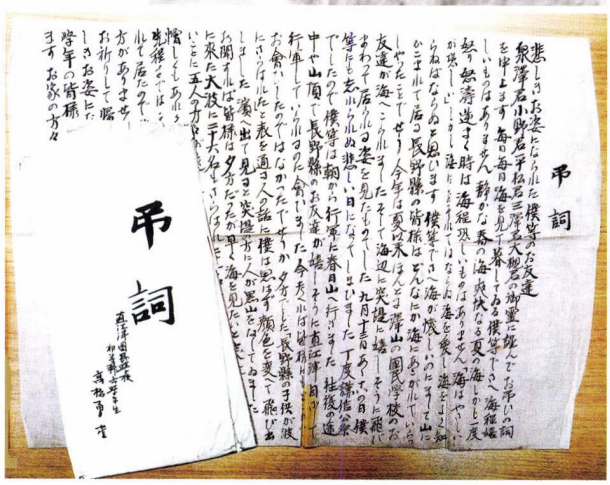
僕と同じ六学年の皆様かと思うと、ただ胸がいっぱいになり、涙のにじむのを感じます。おうちの方々のお悲しみ、さこそとお察しいたします。

僕は海の恐ろしさをはっきり知りました。しかし僕等が皆様の死により、海を恐れるようなことがあってはかえって皆様の霊をお慰めする為にはならぬと思います。憧れの海に不慮の死を遂げられた五人の皆様。僕等は海を愛し益々活躍の舞台といたします。

僕等は必ずや将来立派な海の民として働きます。これこそ皆様が必ずお喜びくださる事と思い、かたくお誓いいたします。泉沢君、小野君、平松君、三沢君、大槻君どうぞ安らかにお眠りくださるようお祈りいたします。

直江津国民学校代表
初等科六年　高橋勇壹




弔詞

上 加賀街道を歩く小学生（昭和 28 年頃の撮影）
下 高橋勇壹さんの弔辞（中箕輪町郷土博物館所蔵）

残るは只一人―
父兄を乗せ義勇丸捜査

遭難した五名の児童中一五日、泉澤、大和、大槻三君の死体は発見され荼毘に付し、一六日午前一〇時八分直江津駅発列車で三児童の遺骨は父兄に抱かれて帰信したが、残る二死体中、金八さん長男平松訓章（一三）君の死体は一六日午後一時過ぎ河口で発見されたので、齊さん二男三沢英行（一三）君だけとなり、引き続き水難救助義勇丸は父兄を乗せて捜査中。

古川長四郎町長弔辞（箕輪町郷土博物館所蔵・新聞には掲載されていない）

弔辞

本日、此の清浄なる聴信寺の御堂に於て九月一三日不幸遭難されました

故　大槻良平君
故　泉澤利典君
故　小野茂雄君
故　平松訓章訓
故　三澤英行君

に対し慰霊の行事を致しますに当たり聊か微衷を披歴し零を慰めたいと思います。

顧みるに諸君が郷里を出らるる時は直江津の青海原を眺め思い切り海の気を吸わんと張り切った心持で来られた事でありましょう。

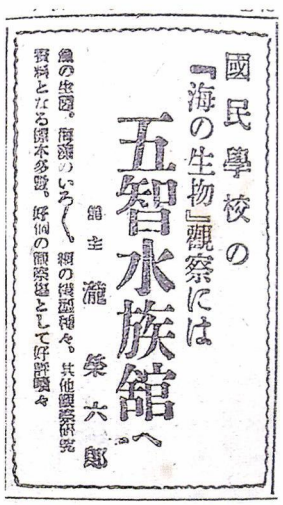
然るに不仕合のことには天候悪く日本海特有の波浪突然起こり波に不倣れの諸君を襲い楽しい気持を踏み躙り無残にも怒涛の中に巻き込み再び帰らぬ身といたしました実に悲しい極みであります。

当町といたしましては未だ嘗て無い遺憾のことでありますので、五名に対して心を尽くしてお慰めいたしたいと思います。

茲に直江津町並びに当町国民学校、当町各宗協会主催の







上　堤防の下で魚取りに興じる子どもたち（昭和三〇年代撮影）
中　つたや旅館の絵はがき
　昭和六年の火災以降二階建てに変わっていた。
右　上越新聞に掲載された五智水族館の広告

もとにこの慰霊祭を行い五君の成仏をお祈りいたして弔辞といたします。

昭和一七年九月一五日

直江津町長　古川長四郎

＊微衷　自分のまごころ・本心をへりくだっていう。

当時の修学旅行と直江津

当時の修学旅行は、昭和一六年に「鍛錬旅行」と変わったように、太平洋戦争のさなか海事思想の醸成と国防意識高揚のための心身鍛錬を中心としたものに変わっていきました。群馬県の中学校では清水峠を越えて新潟から日本海岸を一日四〇㎞近く歩き、親不知まで行軍した例もあったといいます。右のような観点から、海のない土地の子ども達にとって「海を体験する」ことは、修学旅行の重要な目的で、中箕輪国民学校も例外ではなかったはずです。

直江津は、太平洋側の海水浴場から見ると水質の良さに加え、「風紀上からも修学旅行に最適である」と、埼玉県から視察に来た学校関係者が語ったという話も残っており、時期になると長野県の学校あてに葉書を出すなど、積極的に修学旅行の勧誘を行っていました。ことに、事件の舞台となってしまったつたや旅館は積極的に勧誘を行い、修学旅行の思い出の宿、つたや旅館を再び訪れる人たちも少なくなかったといいます。

このような背景のなかで行われた中箕輪国民学校の修学旅行は、春日山駅から春日山山頂・林泉寺・五智国分寺・水族館を見学し、一〇㎞近い距離を徒歩でつたや旅館に至っています。そして初めて見る海に心躍らせる子ども達に大惨事が襲いかかることになります。

事件の原因やその後の救助の模様は学校側の聞き取り（特別展図録）と上越新聞の報道とそれほどかけ離れたものではありません。しかし、波に洗われて海藻が付き、滑りやすく危険な荒川（関川）河口の突堤になぜ子どもたちが向かったのか。じつは、突堤は自然の中でカニなどを見たり触ったりできる所で、観光客の人気のまとであり、当時の観光パンフレット等にも紹介されています。中箕輪国民学校も突堤は予定のコースだったと思われ、前日の第一班も突堤上に立っていました。

事件のその後

図録は表紙が春日山から見る日本海。走るようにしてつたや旅館に着くと、「海にやたら行ってはだめだぞ」と言う旅館の男衆の声もそこそこにして海へ向かってしまった様子、今でも九月になると「ああ直江津の頃だなあ」



牛沢博美校長の顕彰碑

と述懐する人達の聞き書きがあり、直江津町民の対応も載せられていて、第一救助者の柴さんに翌日、ケガをした生徒が病院へ連れて行ってもらったことや、「直江津の方は仏様を大事にしてくれるので、遺体をきれいにしていてくれたから諦めなきゃ」と言う母親の言葉、聴信寺で行われた学校・各宗協会で行われた慰霊祭について、犠牲者の父親の「町長及び六年生にて盛大なる慰霊祭なり」という言葉などが載せられています。

また、「もうひとつの遭難」が、木曽駒ケ岳遭難事件と同様、単なる「業務上過失致死」という事件に終わらせないという学校として対応が詳しく載せられています。

遺族への状況説明や弔問が終わった後、牛沢博美校長は職員に向かって「この事件を基にして大いに憤を発（発憤）して天下に立つ教育を立つべし」と述べ、村葬の弔辞でも、―将来、中箕輪学校の使命を全くし、学童生徒が忠孝両全の善士となれば、学校の盛時、国家安泰となる。それはすべて「皆御身達の精霊の致す所に帰す」と、これが悲劇で終わらせるのではなく教育の一環として立ち向かっていく決意が述べられています。

牛沢校長はすべての処理が終わったのち退職。しかしその熱心な教育方針によって乞われて信濃教育会の幹事となり、戦時下にもかかわらず「信濃教育」を発行し続け、今も刊行されています。

教え子たちの会「博美六人力会（うつみろくにんりきかい）」（校長と犠牲者五人と自分の力）を中心に、事件の四〇年後、現箕輪中部小学校の校庭に校長の頌徳碑が建立されました。

そして、それに先立つ昭和二九年、事件の一三回忌に同級生が遭難者の慰霊碑を建立しました。

銘文には修学旅行の意義、事件のあらましが記され、「吾一人ニ五人ノ分ヲ負ハンノ意気ニテ、冠スルニ牛沢博美氏ノ…」と残された級友の思いが刻まれて、牛沢校長の教えが脈々と生きていることを伝え、今も慰霊の日には児童の拝礼が続けられています。

六年一組を引率し、遭難事件の当事者となってしまった村上先生は当時わずか一九歳。訓導としての初任地でした。禁固刑を受けて退職し、満鉄に就職して将来の幹部候補生として嘱望されましたが、事件の禁固刑が知れて失格し、戦後は長野県警に奉職しましたがここでも刑が知れて昇進が沙汰止になり、その後は身を隠すようにして暮らしたということです。（取材・北越出版佐藤）



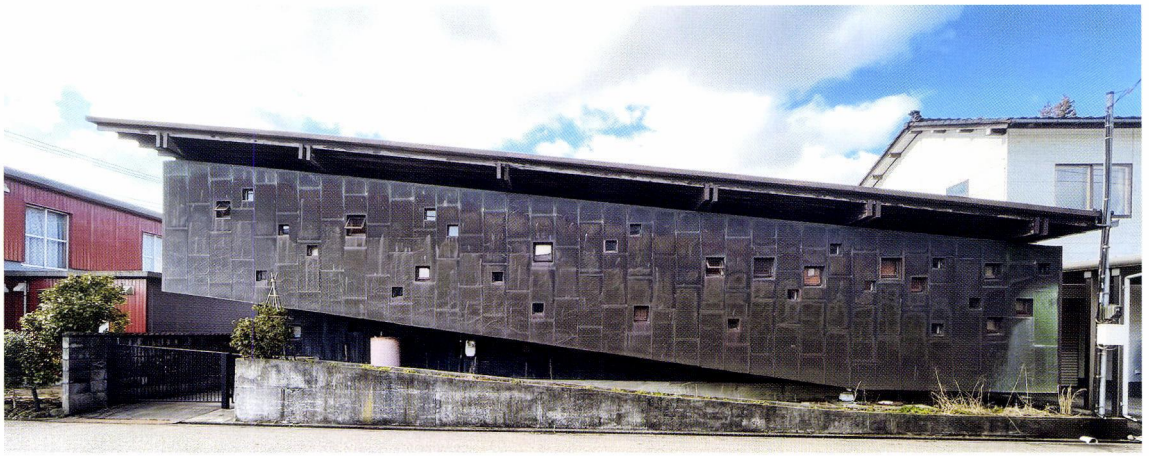
遭難児童の慰霊碑

〔参考文献〕
「もうひとつの遭難～中箕輪国民学校の直江津遭難～」
平成二七年度特別展図録・中箕輪町郷土博物館
「上越新聞」（昭和一七年九月）上越市立図書館
取材協力
中箕輪中部小学校／中箕輪町郷土博物館／上越市立公文書センター／上越市教育委員会文化行政課／上越市荒川町内会長大島博彦・天王町町内会長角澤昭夫／上越市議木南和也／保坂清美／佐藤新治／石井春男／川島治郎七商店

◆上越出身の世界的建築家 渡邊洋治生誕100周年記念

「斜めの家」を理解せずに 上越の建築文化を語るなかれ

ナナメの会主催　建築家　中野一敏



斜めの家北側外観（上越市春日地区）

挑発的なタイトルだと思う人もいるだろう。しかし私には、渡邊洋治（一九二三―一九八三）が「斜めの家を理解せずに、上越の建築文化を語るなかれ」と言っているように思える。上越の建築文化とは、現在進行形の私たちの時代の建築文化を意味している。古い文化財になると、過去の建築文化の遺産であって、現代の建築文化に直接つながって来ない。「斜めの家」は、上越の現代の建築文化に直接つながった、いわば原点だと考えている。

「斜めの家」は、渡邊洋治が妹夫婦のために設計し、一九七六年に完成した住宅で、上越市に残っている。渡邊洋治が設計し実現した最後の建築物にあたる。渡邊洋治って誰？と思う読者もおられると思う。渡邊洋治の経歴については後で触れるとして、とりあえずは上越出身の世界的に名の知れた建築家であると理解していただいて読み進めてほしい。

私は二〇一三年に、「斜めの家」を保存活用する有志の会に建築専門家としてお声がけいただき参加することになった。その活動の様子は、〈渡邊洋治『斜めの家』再生プロジェクト〉というFacebookページで公開してきた。

活動の発端は、渡邊洋治の親族である所有者の「渡邊洋治の建築作品を建築に興味のある人々に広く見ていただきたい」という想いがもとになり、それに賛同した橋本桂子さん（一九七二―二〇二〇）がプロジェクトを立ち上げたのである。

橋本さんに声をかけていただいたのは、新潟市に向かう高速バスの中だった。大学で絵画を専攻した橋本さんとは以前から面識はあったのだが、同じ高速バスにたまたま乗り合わせていたのである。なぜかその時の印象をよく覚えているのだが、それは橋本さんが―斜めの家のことを誰に声をかけたらいいか―と、きっとモヤモヤした状態だったのだと思う。大きな可能性を秘めているが、他に類似の事例が少なく、理解しあうことが困難なプロジェクトだと感じていたのではないだろうか。

このプロジェクトの困難さとはなにか。

橋本さんが初めて「斜めの家」を訪れた二〇一〇年、空き家になっていた「斜めの家」に購入希望者が現れ、新たな住人の要望に沿ってリフォーム工事計画が進行していた。しかし、この計画は渡邊洋治の親族である現在の所有者の申し出によって寸前で取りやめになった。リフォーム工事によって、渡邊洋治が設計した「斜めの家」のオリジナル性が大きく損なわれてしまうことを思案されてのことであった。

普通、空き家になった古い住宅に、購入希望者が見つかることは喜ばしいことである。そして、新たな住人の要望でリフォーム工事が行われることはめずらしくない。寸前で取りやめとなったこの計画を進めていた建築関係者も、良かれと思って計画を行っていたに違いない。さらに言えば、建築関係者の仕事は、そうした行為から生まれるのが普通である。

建築の専門知識のない橋本さんは、建築関係者に協力を求めたいが、普通の建築関係者には、このプロジェクトの意図が理解できないのではないかと、モヤモヤしていたように思えるのだ。

渡邊洋治の親族である所有者が、洋治が設計した「斜めの家」のオリジナル性にこだわるのは、「斜めの家」が彼の作品として、建築関係者に十分に吟味されていないと感じたからであろう。「斜めの家」は、洋治が亡くなってから編まれた「渡邊洋治建築作品集」に掲載されているが、生前、建築雑誌に公表されなかったようで、建築関係者にはあまり知られていない。そして、「斜めの家」がなぜこのようなデザインになっているのか、彼の設計意図も分かっていなかった。

「斜めの家」が、渡邊洋治の作品として知られていなかった事を示すエピソードを紹介したい。建築史が専門で、建築の設計も手掛けている藤森昭信東京大学名誉教授が「斜めの家」を訪れ、「藤森昭信の原・現代住宅再見2」という本に書いたエピソードである。「斜めの家」を訪れる前、こちらは、渡邊洋治の作品として有名な「龍の砦」と呼ばれる住宅作品を訪れ、同シリーズの「藤森昭信の原・現代住宅再見」に書いたところ、渡邊洋治の親族から感謝の手紙が届くと共に「斜めの家」を紹介されたという。そして、二〇〇〇年に渡邊洋治の妹夫婦が住む「斜めの家」を訪れ、少なからずショックを受け、異例であるが、同シリーズに渡邊洋治作品を二度も取り上げたのだという。同書から引用する。

これほどの住宅作品が人知れず立っていようとは。洋治さんといえばナンタッテ、「龍の砦」であり、「軍艦ビル（第三スカイビル）」（一九七〇）であり、四角な箱に収まるような中小住宅なんて、と思ってきた。見るからに激しい表現の「龍」と「軍艦」の両作の陰に隠れてこれまで誰もその重要性に気づかなかった。

（出展：藤森昭信の原・現代住宅再見2　P108）

一九七六年に完成した住宅の重要性に、二〇〇〇年まで建築関係者は気づいていなかったのだという。「斜めの家」の重要性について、同書（P113）には次のように書いている。

これまで、コルビュジエ派の木造住宅というと、レーモンドの「夏の家」（一九三三）、前川國男の「自邸」（一九四二）、増沢洵の「自邸」（一九五二）、吉村順三の「軽井沢の山荘」（一九六二）の四作をもって時期ごとの代表作とし、それでことたれりとしてきたが、そこで終わらず、それに引き継ぐものとして、渡邊洋治の〈斜めの家〉を加えてもいいんじゃあるまいか。

藤森氏によれば、「斜めの家」の重要性はすさまじいものである。コルビュジエ（一八八七―一九六五）は、モダニズム建築の巨匠であり、明治時代に日本が輸入したヨーロッパの古典主義建築の次の様式にあたる、モダニズム建築の確立に大きな影響を与えた建築家である。モダニズム建築は、二〇世紀初頭に世界を席巻し、昭和になると、日本でも優れたモダニズム建築が建てられるようになった。取り上げられた四作品はどれも大変に有名なものであり、コルビュジエの弟子筋によって設計され、日本の現代住宅建築に大きな影響を与えてきた。四作品の最後に取り上げられた建築家で東京藝術大学名誉教授の吉村順三（一九〇八―一九九七）は、その作風を引き継ぐ弟子にも多く大きな影響を与え続けている。藤森氏は、この有名な四作品では足らずに、そこで終わらずに、それを引き継ぐものとして渡邊洋治の「斜めの家」を加えてもいいのではないかと言うのだ。

もうお気づきの方も多いと思うが、渡邊洋治も、コルビュジエの弟子筋にあたる。コルビュジエに師事した日本人建築家で最も若い弟子である吉阪隆正元早稲田大学教授（一九一七―一九八〇）の研究室で、洋治は助手を務め、戦後の現代建築にも大きな影響を与えたコルビュジエの晩年の作品からも影響を受けたのである。

私たちのような上越の建築家は幸いである。大先輩が上越に残した「斜めの家」を深く理解することで、目指すべき主流となる方向性が見えてくるに違いない。上越の建築文化も幸いである。「斜めの家」が示した方向性の先にある、上越の建築家の作品群が足掛かりとなって、未来の上越の建築文化が創造されていくだろう。これが、橋本さんが始めた渡邊洋治設計「斜めの家」再生プロジェクトの秘めた大きな可能性である。

ここで、「渡邊洋治建築作品集」を元に、渡邊洋治の経歴について簡潔に記載しておきたい。

・一九二三年（大正一二）六月一四日、新潟県上越市（旧直江津市）に大工の棟梁の長男として生まれる。祖父は、「いかや八角塔」の棟梁である。

・一九四一年（昭和一六）、高田商工学校（現・県立上越総合技術高等学校）を卒業。日本ステンレス直江津工場に就職。渡辺仁建築工務所・大阪府営繕課勤務の経歴を持つ西田勇という建築家から建築の世界を学ぶ。太平洋戦争中は船舶兵としてフィリピン・セブ島に入営。幹部候補生試験に合格し帰国。陸軍予備士官学校卒業後、新潟・日本海船舶司令部に勤務。戦後、日本ステンレスに復職した後に上京。

・一九四七～一九五四年（昭和二二～二九）、久米建築事務所（現・久米設計）に勤務。

・一九五五年（昭和三〇）から三年間、早稲田大学吉阪研究室助手を務め、コルビュジエのもとから帰国したば

かりの吉阪隆正に師事する。
・一九五八年（昭和三三）、独立し、渡辺建築事務所を開設。
・一九五九年（昭和三四）、早稲田大学講師になる。
・一九六九年（昭和四四）、最高裁判所庁舎の競技設計で優秀賞を得る。
・一九七〇年（昭和四五）、第三スカイビル（鉄のマンション）が竣工し、国際的に注目を集める。早稲田大学大学院特殊学生となり、一九七三年（昭和四八）まで、講師であり学生として過ごす。
・一九七六年（昭和五一）、斜めの家竣工。
・一九七九年（昭和五四）、ニューヨーク近代美術館の展覧会（Transformation in Modern Architecture）に、善道寺（糸魚川市）と鉄のマンションを出品する。
・一九八三年（昭和五八）、アメリカ・モンタナ州立大学、ニュージーランド・オークランド大学で招聘講演を行う。
・一九八三年（昭和五八）一一月二日に急逝。享年六〇歳。
・二〇二三（令和五）年は、生誕一〇〇周年。

私は、「斜めの家」がなぜこのようなデザインになっているのか、渡邊洋治の設計意図に興味を持っていた。「斜めの家」の特徴を一言で表せば、「階段の無い、二階建て住宅」である。傾斜のある廊下（スロープ）が、一階から、二階まで、少しずつ地面からの床高が高くなる部屋をつないでいる。廊下の傾斜が、建物の外観の特徴となっており、「斜めの家」と名付けられている。

二〇一三年に、渡邊洋治「斜めの家」再生プロジェクトを始めた頃、上越市の建築関係者の間では、住人の足が悪かったから、このようになっていると言われていた。それはおそらく、新聞誌上での住人の発言がもとになっていると思われる。

階段ではなくスロープを採り入れたのは「老後のことを考えて」という。傾斜度は八分の一こう配（八㍍行って一㍍さがる）で、きわめて緩やか。階段から落ちる心配もないし「とにかくラクです。一、二階の感覚がなくなり、知らぬうちに二階に行ってしまう。階段を上下するおっくうさが消えました」とシデさん。階段の与える一、二階の〝分離感〟はなく、むしろ一体感さえ持つような効果をスロープが生み出している。「お年寄りや小さな子供のいる家にはいいかもしれない」と田中さん。

（出展：「住まい拝見」新潟日報社学芸部）

住人に、このように受け止められていたのは事実のようである。内部を見学して同じような意見を持つ方も多い。一方で、段差を無くしたバリアフリー対応になっているわけではない点と、八分の一勾配が、きわめて緩やかとは言えない点にも注意する必要がある。また、「斜めの家」には、建築された最終案の前に、二つの案がある。それらは、階段のある二階建て住宅であった。したがって、スロープは、設計当初から与えられていた条件ではなかった。現在の所有者によると、設計当時、住人の足は悪くなかったとのことである。おそらく、「老後のことを考えて」というのも、建築家が語った方便であるのだろう。私は、渡邊洋治の設計意図は、他にあるのだろうと思っていた。

二〇一四年から、二〇一六年にかけて、渡邊洋治設計「斜めの家」再生プロジェクトでは、設計当時を知る現代美術家・舟見倹二（一九二五―二〇二〇）氏、「斜めの家」を施工した岩島工務店の岩島氏らにお話をうかがい、記録を取ってきた。

舟見倹二氏によると、渡邊洋治は、「斜めの家」を作る

ころ、「潜水艦」を作ると語っていたという。「軍艦マンション」と呼ばれた新宿の「第三スカイビル」や、「航空母艦」と呼ばれた、直江津の「旧労災病院」と関連する、軍事色のある渡邊洋治らしいモチーフである。渡邊洋治が子供のころ、直江津の海に軍艦が停泊していたというし、戦時中は船舶兵の経験もある。コルビュジエも古い様式を脱して、モダニズム建築をめざす時、「商船」をモデルにしていた。したがって、「船」をモデルにするのは、モダニズム建築の影響下ではめずらしくはないが、軍事色を出すのは、洋治らしい個性だろう。しかし、「斜めの家」は「潜水艦」である。なぜ、沈むのだろうか。後に私は、「船」が「潜水艦」になったことが、彼の建築がモダニズム建築から現代建築へ移行した事を示していると考えるようになる。

一九二〇年代にヨーロッパでコルビュジエらが確立しようとしたモダニズム建築は、今から見れば個人や地域などの特殊性をこえて、世界共通の様式を作ろうとするものであった。戦後から一九七〇年代にかけて、モダニズム建築が各国、各地域へと伝播する中で、地域や個人の特殊性と再び交わり変容する姿が現代建築として現れてきた。

渡邊洋治が生涯に残した作品群（一九五〇～一九八〇年代）も、この時代の流れに沿うように、モダニズム建築の影響がうかがわれる作品から始まり、徐々に個性的、地域的な表現が目立つようになってくる。洋治の個性的表現は、「軍艦」、「龍」などのイメージを建築物に持ち込んだところである。そして、その陰に隠れてしまいがちであるが、当時は裏日本と呼ばれた出身地の地域性を背負っていた。建築評論家の長谷川堯は、次のように書いている。

このような渡邊さんの少年期から青年期にかけての経歴において、後の彼の仕事に関連して私達が注意を払うべきいくつかの要点があると思う。ひとつは、彼自身がいろいろなところでくりかえし述べているように、生誕地が裏日本の多雪地帯にあり、表日本に比較して想像できないほど陰鬱な冬を覚悟しなければならない風土に育ったという点―。

（出展：渡邊洋治論
日本海の怒涛は今も押し寄せる／長谷川堯）

さて、渡邊洋治が「斜めの家」を作るときに語ったという「潜水艦」は何を意味するのだろうか。橋本さんが舟見氏から聞いたところによると、〈田植えされ稲が育つにつれて稲穂の海に建物が沈む。稲刈りが行われると再び建物が浮上する〉という意図があったようである。後日、記録会を開いた際には残念ながら、舟見氏からこの話を確認することが出来なかった。しかし、黄金色に輝く稲穂の海に沈む、銅色に輝く「斜めの家」のイメージは、劇的な美しさがあり、真実味をもって私に迫ってくるように感じられた。渡邊洋治の生まれ育ったこの地の地域性と結びついた表現だと言える。「斜めの家」が出来た頃の写真を確認すると、周囲はすでに宅地化が進んでいるように見える。したがって、稲穂の海に沈む「斜めの家」が、実際に見えたのか、渡邊洋治のイメージの中にのみ存在したのかは、分かっていない。

「潜水艦」の意味はそれだけであろうか。渡邊洋治は、上越が多雪地帯であることを意識していた。「斜めの家」は、雪に沈む「潜水艦」でもあったのではないだろうか。

「斜めの家」には、様々な高さに「舷窓」のような小窓が開けられている。「斜めの家」が雪に沈む時、「ああ、こんなに積もったか」と、周囲の雪の高さを確認できるような窓のように感じられる。小窓が、外をのぞき見る行為を意識させるのには理由がある。設計図には、これらの小窓の位置を示す寸法が描かれていない。「斜めの家」を施工した岩島工務店の岩島氏によると、「渡邊洋治は窓をつけるおおよその場所に行って、外に何か見えそうな位置に窓をつけるように指示をした」のだという。

さらに、「斜めの家」の見学会で撮った一枚の写真と、たまたま目にした昭和二八年の高田の雁木通りの写真の類似性に気づいた。「斜めの家」の空間は、雪に沈むことを前提に造られた雁木通りの空間と類似している。やはり、「潜水艦」は雪に沈むことを意味していると思うようになった。

見学会の時に撮ったスロープ空間の写真（次頁上段）を見てほしい。女性が歩いているスロープ空間の左上から子供が頭を出して見下ろしている。この子どもがいるのは、折り返して二階へと上がるスロープ空間であり、スロープの床高は、女性がいるスロープ空間よりも一m以上高くなっている。女性の右上に見える光が差し込む開口部は、二階の部屋の低い位置、床から開けられた地窓である。女性が歩いているスロープ空間の左右には、様々な床高の空間があり、光や風が通り、視線が交錯する立体的で親密な空間が広がっている。

次に、昭和二八年の高田の雁木通りの写真（次頁下段）を見てほしい。雪の積もった通りを男性がソリを引いて行く。それを上からスキーを履いた子供達が見下ろしてい



上　水田に浮かぶ「斜めの家」　作：石田賢一郎

下　積雪時の「斜めの家」

る。きっと通りの左右の雁木から見上げる視線もあるだろう。そして、その雁木は、すれ違う人の肩が触れ合う親密な路地空間である。雪が積もった雁木通りには、立体的で親密な空間が広がっていた。「斜めの家」の空間には、渡邊洋治を育んできた空間が投影されているように感じられる。「潜水艦」は、それらを読み解くキーワードであると考えている。

ここで一度「潜水艦」を離れ、「斜めの家」のデザインを見てみたい。コルビュジエは、多くの建築作品でスロープを好んで使っている。ランダムに開けられた小窓も、コルビュジエの建築作品の中に見つけることが出来る。そして、渡邊洋治は、コルビュジエを意識していた。

―彼は私の所へとんできて、いよいよコルビュジェを乗り越えることができましたよと誇らかに語った。

―まるでお前もコルビュジェの弟子なら、そのくらいのことを提案して乗りこえて見ろといわんばかりの勢いであったが、学生にこのくらいの元気が欲しいと思う。

（出展：作品批評「龍の砦」に想う／吉阪隆正）

私達は、渡邊洋治が語っていなくとも、コルビュジエ作品との関係を真っ先に考える必要があるだろう。建築関係者を招いた見学会では、そうした話題になることが多かった。中でも、インドの都市チャンディーガルにコルビュジエが造った、「行政庁舎」（一九五八）と呼ばれる建築物のスロープ空間と「斜めの家」のスロープ空間との類似性は、大きな気づきであった。なお、コルビュジエの設計したチャンディーガルの建築群は、コルビュジエ最晩年の作品群にあたる。

渡邊洋治建築作品集によると、一九七四年から一九三八年まで、学生のための密度の高い研修旅行を企画立案し、





上 見学会の時の「斜めの家」スロープ空間
下 昭和 28 年の高田の雁木通り　岡観容：撮影

毎年旅行会を引率したという。一九七五年、吉阪隆正（早稲田大学教授）を団長とするチャンディーガル研修旅行が行われており、渡邊洋治（早稲田大学講師）は幹事として名を連ねている。この一九七五年の研修旅行に参加した舟見倹二氏のもとに、旅行で撮影したスライドフィルム、募集要項などの資料が残されており、二〇一五年末に見せていただくことが出来た。

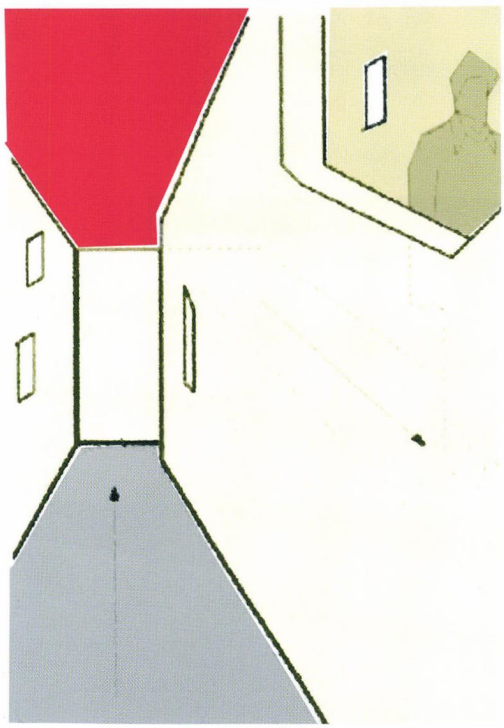
一九七五年の募集要項には、一九七二年、七四年に、一四〇数名でインド各地を歴訪したと書かれており、一九七四年から毎年旅行会を引率したという、渡邊洋治建築作品集の記録と合わせて考えると、一九七四年の旅行にも、洋治が参加していると類推される。一九七四年から、一九七五年は、斜めの家の設計期間にあたる。この時期に渡邊洋治が何を見て、何に興味を持ったかを知る貴重な資料が残されていた。

そして私達は、舟見氏のスライドフィルムに、「行政庁舎」（一九五八）の外観を見つけることが出来た。そこには、スロープ空間の外観もおさめられていた。洋治は、「斜めの家」の設計中に、「行政庁舎」を見たのであろう。そして、「斜めの家」の設計案は、最初の二案から大きく飛躍して最終形に至ったように思われる。「斜めの家」の設計時点で、世界の建築の潮流を強く意識していたことがとても重要だと考えている。

ここで、「行政庁舎」のスロープ空間と、「斜めの家」の類似点を記しておく。

「行政庁舎」は、横長の直方体形状の高層ビルであるが、スロープ空間が独立した立体としてその直方体の外側に飛び出している。そこには、小窓が沢山開いており、「斜めの家」の北側の外観と良く似ている。「行政庁舎」のスロープ空間は、「斜めの家」と同様に、折り返しのスロープ空間である。隣り合うスロープの間に壁があり、穴が開けられているところも同じである。内部の色も似ている。「斜めの家」のスロープ空間は、床が赤いじゅうたんで、壁はベージュ系の布クロスであり、「行政庁舎」のスロープ空間は、天井が赤く塗られており、壁は写真ではやや





上 コルビュジエ設計チャンディーガル「行政庁舎」（1958）舟見倹二：撮影

下 コルビュジエ設計チャンディーガル「行政庁舎」（1958）スロープ空間

ベージュっぽく見えるコンクリート打ち放しである。

最後に、ここまで私が読み解いてきた「斜めの家」の設計意図をまとめ、その重要性について記したい。

モダニズム建築の確立に大きな影響を与え、戦後の現代建築にも大きな影響を与えたコルビュジエ建築に、洋治自身を育んだ環境と体験に基づいて、そこに個人的表現を加えた「斜めの家」は、コルビュジエ建築を現代的に乗り越えようと意図した作品であり、藤森氏が書いているように、日本におけるコルビュジエ派の有名な四つの木造住宅を引き継ぐ名作であろう。

そして、私達上越の建築家に「斜めの家」は、偉大な先輩が上越の地に一つの住宅作品を作ることによって、上越の建築文化を創っていく方法を具体的に示したものであり、上越の現代の建築文化に直接つながった、いわば原点だと考えられる。

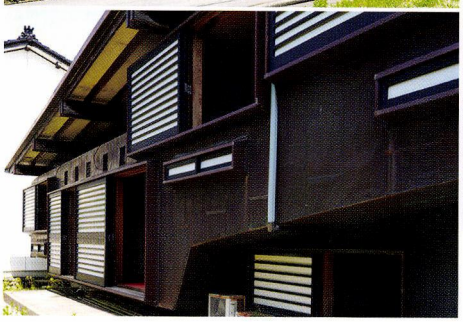
私自身も、上越の建築家として上越の建築文化を築いていくうえで、重要だと思う方法を渡邊洋治の「斜めの家」の設計の中に見つけることが出来るからである。

プロフィール

一九七五年吉川町（上越市吉川区）生まれ。
高田高校・横浜国立大学・同大学院修了。
日本建築学会北陸支部第二八回北陸建築文化賞〈作品部門〉受賞・LOCAL REPUBLIC AWARD 2019 佳作
建築家・一級建築士
ナカノデザイン一級建築士事務所代表
ナナメの会代表
新潟工科大学非常勤講師・上越総合技術高校非常勤講師

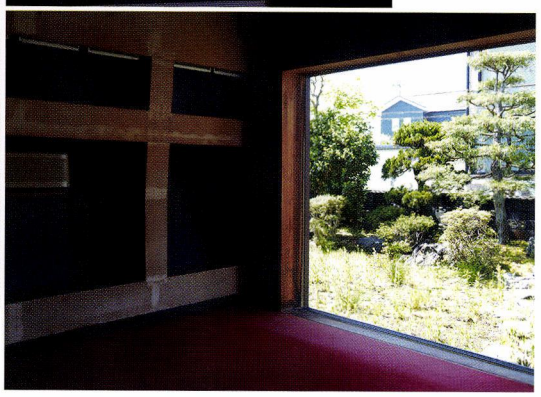
斜めの家











地下四メートルの縄文遺跡

―四〇〇〇年前の土地選択―

小島幸雄

はじめに

令和四年六月、新潟県考古学会で半世紀余りに及ぶ私の考古学との接し方を話す機会を与えていただいた。半世紀の間に社会が大きく変化してきたように、考古学も大きな変化を遂げたことをお話しした。昭和四〇年代初めにせいぜい数一〇〇㎡程度の遺跡発掘を経験した私は、一〇年もたたないうちに数万㎡という想像もつかない発掘調査の世界を経験することになった。昭和三〇年代終わりに生家の前を通る国道八号でオニヤンマを追っていた少年は、昭和四六年秋に高速道路の発掘に携わり、スコップの人力発掘からブルドーザーが走り回る機械発掘に一変した遺跡調査を経験したのだ。そして、現在はバックホーが発掘調査の主役といってよいほど活躍しているのだ。

ここでは大きく様変わりした遺跡調査と、調査結果が現代とどのようにかかわるかを述べてみたい。





上 空中から見た山畑遺跡
下 山屋敷Ⅰ遺跡の土器

上越教育大学の遺跡調査

昭和五二年から二年間をかけて行われた上越教育大学敷地内の遺跡調査は、縄文時代中期の集落と古墳時代終末期の二カ所の大きな遺跡のほか三カ所の計五遺跡の調査を行った。平山段丘と呼ばれる丘の上にある遺跡の土



国土地理院発行 1:50,000「高田東部」

上 下割遺跡の位置



下　出土したハート形土偶の頭部
（上・下　新潟県埋蔵文化財調査事業団現地説明会資料より）

は掘りやすく、三遺跡で百棟近い竪穴住居跡を調査した。

縄文時代の集落は山屋敷Ⅰ遺跡といって現在の大学の南の入口を入ったところにあり、その当時は縄文時代の遺跡は尾根の上にあると考えるのが常識的で、遺跡の範囲を考えながら調査を進めたものだった。その結果、写真に示したような各地の影響を受けた土器が出土し、その調査結果は「上越市史通史編1」などに記録されている。

古墳時代終末期の遺跡は山畑遺跡という。今の大学の建物でいうと体育館あたりである。山畑遺跡は当時資料の少ない時期の遺跡だったため北陸地方の古代遺跡研究者から多くの関心を集めたことを記憶している。縄文時代から弥生時代を経て古墳時代・飛鳥時代へと時代は変わっても平山段丘の良好な空間は人々の生活適地だったのだ。

地下四ｍで見つかった縄文集落

令和三年、上越三和道路建設に先立って実施された下割遺跡で、地下四ｍの深さから縄文時代後期の集落遺跡が発掘された。現地説明会は中止となったようだが、調査を行った公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）のＨＰに資料が掲載されているので大まかな内容を知ることができる。それによれば、

・遺跡周辺の標高は一四ｍ前後である。
・地下四ｍから縄文時代の集落を良好な状態で検出した。
・遺物包含層は強い水流で削平されていた。
・縄文時代の遺跡の範囲は、東西一七〇ｍほどである。
・古墳時代前期の土器も出土している。

などと記されていて、最後のまとめには次のようにあった。

地表下四ｍの縄文時代の遺跡の存在は、上越市の歴史を変える調査となりました。（原文のまま）

昨年も発掘調査が行われていて、現地説明会が開催された。その時の資料も事業団のＨＰで閲覧できる。資料の中から縄文後期の遺跡に関する記述を抜き出してみると、

地下四ｍに埋没している縄文遺跡は、高田平野の成り立ちを考えるうえで重要な資料といえます。

そしてまとめでは、

かつて高田平野には、大きく蛇行する川と多くの潟湖が存在しました。人々はこれを交通網とし、舟を使って行き交っていたようです。「舟運」の存在は、下割遺跡が築かれた背景であったと考えられます。

とまとめられていた。同じ調査成果を公表する文章でも大きく変わったものとなっている。

これまでも平野で多くの遺跡が調査されてきた。その多くはほ場整備にかかわるもので、深さは工事の及ぶ範囲と決められていたので深さはせいぜい二mにとどまっていた。平成五年に工事中に発見された東中島の北割遺跡は地表から一・五mの深さで標高五・五mというものであり、当時長谷川康雄氏（故人）と沈降したのかもしれないと話し合ったこともあった。調査報告書には次のような記述がある。

「（前略）本遺跡の調査成果は、今後の市内の遺跡調査に多大な影響を与えることは必至で、水害で水没したと考えられる本遺跡の調査結果を遺跡の調査ばかりでなく、平野生成を考えられる材料ともなるものと考えられる」。（原文のまま）

なお、沈降か否かは今も不明である。

平野で限られるのか縄文集落

上越三和道路は大字寺から三和区本郷間の道路であるので、平野の関川右岸を東西に横断する長いトレンチを発掘調査しているとも言える。したがって、その調査成果は前述の資料にあったように平野の生成過程を知る貴重な資料となろう。そして地表下四mで見つかった縄文後期の遺跡は、約四〇〇〇年前にそこが先人の生活場所として適地だったことを示している。標高も現在の海抜で約一〇mであり、四〇〇〇年前は標高が一〇mあれば縄文時代の人たちが生活できたということも示している。

さて、上越三和道路は遺跡の調査が継続して実施されていて、筆者が知りうる範囲ではこれまで八カ所の発掘調査が実施されていた。しかし、縄文時代にさかのぼる遺跡は下割遺跡に限られ、そのほかの遺跡では古墳時代前期、約一七〇〇年前というのが最も古い時代の遺跡のようだ。上越市でもほ場整備に関連した発掘調査が行われ、古墳時代前期からほとんどの時代で人が何らかの行動した跡が見つかっている。また、発掘調査された遺跡の標高は場所によって異なるが、一一m以上の数値を示していた。

これらの調査成果を総合すると、高田平野の関川右岸の遺跡分布は下割遺跡が突出して古いことになり、その後いったん人の活動適地から外れて千数百年経過した古墳時代前期に至って平野全体に生活適地が発生したことになる。そして、その標高は一〇mから一一mを示していた。なお、前述の北割遺跡では六m以下でも古墳時代前期から活動痕跡がある。

だとすると、下割遺跡の縄文時代の遺跡は丘状の自然堤防であったか、もしくは飯田川の扇状地から舌状に延びる自然堤防であったかということになる。筆者はほ場整備の発掘調査結果から、飯田川をはじめ今見られる関川の支流の大半は一部であれ人工開削の川と考えていて、舌状の尾根が妥当ではないだろうか。余談だが、関川の支流は扇状地を抜けるとこぶし大以下の礫の河床になりサケの産卵に適していると考えている。縄文人が平野に進出した理由の一つに、河床の礫の状況とサケの産卵があるのではなかろうか。とても興味深く成果を見守っている。遺物の整理や自然科学の分析結果が待たれる。

八反田遺跡の標高

ここで、これまで私が見てきた遺跡の発掘調査と標高を見てみる。昭和五九年、新潟県教育委員会による北陸自動車道の発掘調査が行われていた。調査担当者の寺崎

裕助氏から情報が入り水田の下から縄文時代前期（約四〇〇〇年前）の竪穴住居跡が見つかったというのだ。昭和五二年に使用していた二五〇〇分の一の地形図を見ると八反田遺跡付近は水田で標高が一二mとあり、当時の常識からして縄文時代の遺跡が存在するとは思えなかった。前出の山屋敷Ⅰ遺跡が標高三〇m、山畑遺跡が同じく二二mだから縄文時代の遺跡として比較すると約一八mの差があるのだった。七世紀と考えられる山畑遺跡と比較しても一〇m低かった。また、調査した竪穴住居跡の標高は一一・八mであったと報告書に記載されている。

山畑遺跡よりも四〇〇〇年も古い八反田遺跡がなぜ水田の中から現れたのだろうと寺崎氏と考えを巡らせ、八反田遺跡が見つかった土地は平野の大部分を占める水田が作られる沖積地ではなく、山畑や山屋敷遺跡のある平山段丘と呼ばれる洪積台地、ローム層であることにたどり着いた。私は洪積台地という先入観から、台地が沖積層の下に潜り込んでいることを判断できなかったのだ。その後の発掘調査によっても、尾根状で平野に延びる平山段丘のいくつかの尾根で沖積地に潜り込んでいることが確認された。大学前で調査された江向遺跡もその一つであり、平山段丘東縁を蛇行する稲荷中江用水がそのことを我々に教えてくれる。そして、この八反田遺跡の調査は私の関川支流の人工開削という持論のスタートにも大きな影響を及ぼした。河川は洪積台地を横断せずに並行して流れて段丘を形成するが、正善寺川は平山段丘を横断して本来の流路とほぼ九十度東に流れを変えて関川と合流しているのだ。







上 稲荷中江用水（八反田遺跡を迂回する）
中 上教大前の稲荷中江用水（手前が尾根、奥が沢）
下 同上（これも尾根）

発掘調査への機械導入

では、なぜこのような地下何mも深く調査が行えるようになったのかを考えてみる。冒頭に述べた発掘調査の機械化がその答えなのだ。バックホーの発掘調査への導

入が広く深く掘ることができるようになった最大の要因といえる。スコップで掘り一輪車で廃土していた時期からベルトコンベアーが導入され、現在は発掘といえばバックホーが登場する。ブルドーザーのように土地に負荷をかけずに土を移動できるバックホーは発掘に最良の機械なのだ。バックホーの進化は都市での開発が要因として挙げられているように、狭い場所でも非常に効率の良い動きができるようにさまざまな機能が開発され、土を掘るだけではなく用途も無限といっても過大評価ではない。

昭和五二年に山屋敷Ⅰ遺跡の廃土が限界を超えたとき、市役所の土木課（当時）が所有していたブルドーザーで廃土を移動したことがあった。下馬場の古墳群でも援助してもらった。しかしバックホーは普及前で使用していない。筆者が発掘調査にバックホーを活用したのは昭和五九年附属中の増築調査で、ベルトコンベアーとバックホーを併用して土の移動を行った。校地内で場所が狭く、とても重宝したものだ。

バックホーはとても重宝する機械であり、その機能の多様化は発掘調査にも大きな影響を与えた。足場に鉄板を活用すれば極端に言えばどんなところにも行ける、旋回する空間があれば作業はバケットの届く範囲で可能、アームの長さも変更可能、バケットの形を変えれば掘る幅も自由などなど、こんな機能を持つ機械はほかにはない。したがって、発掘調査に投入したらもう手放すことなどできない重要な戦力になったのだった。しかし、一度に掘る量が増えれば破壊する危険性も増す。スコップで掘る量には限度があるが、機械は使い方を間違えたら取り返しがつかない。

機械導入が教えてくれたこと

この半世紀で発掘調査の手法が大きく変化し、広い面積を調査可能にするとともに深く掘るという不可能を可能にする機械力が投入されることになった。頸城の平野でも地下四ｍで縄文遺跡が確認され、先人が平野に進出していった年代も古くなった。この地下に四〇〇〇年も前の人たちが活動していたなんてとてもワクワクする。

しかし、四〇〇〇年前に一度進出したが継続して活動していたか否かは依然として謎である。上越三和道路の継続されてきた発掘調査の結果もそれを示していて、弥生時代を飛び越えて古墳時代前期約一七〇〇年程前に平野のあちこちで活動が確認できるのだ。二〇〇〇年余に及ぶ時間の空白はなぜ生じたのであろうか。四〇〇〇年前の人々の進出とともにとても興味深いのだ。

本誌の三一号（二〇〇八年秋号）に五百川裕氏の「縄文人が作った頸城の「自然」」が掲載されている。氏は植物分類学の立場から、自然と人間のかかわりを論じて、私たちが見ている自然の大半が人間の作用でできてきたとも論じた。そして、稲作の伝播の項を立てて「おそらく最初は谷内（丘陵縁部の谷状地）や川沿い、池沼周囲の水の豊富な湿地から利用されていったことであろう。」と述べている。筆者も四八号で、出土した遺物から弥生時代の稲作適地を砂丘の後背地と平野南部の火砕流によって形成された階段状地形の下段に見られる湧水地と述べたことがあった。

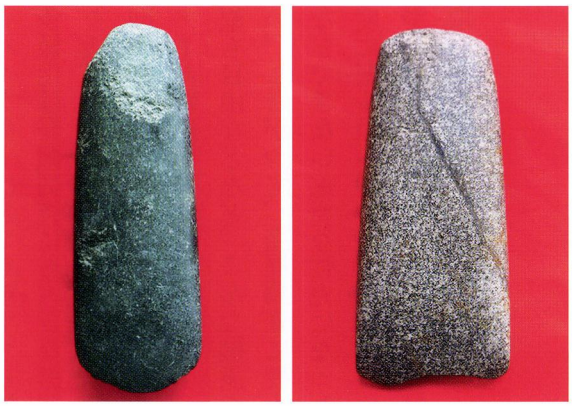
縄文人は現在の段階では稲作をしていないと考えられている（考え方はともかく）。では、なぜ平野部に進出したのであろうか。その答えは持ち合わせていないが、前述のサケの遡上がカギを握っているのではなかろうか。

平野の生成と河川

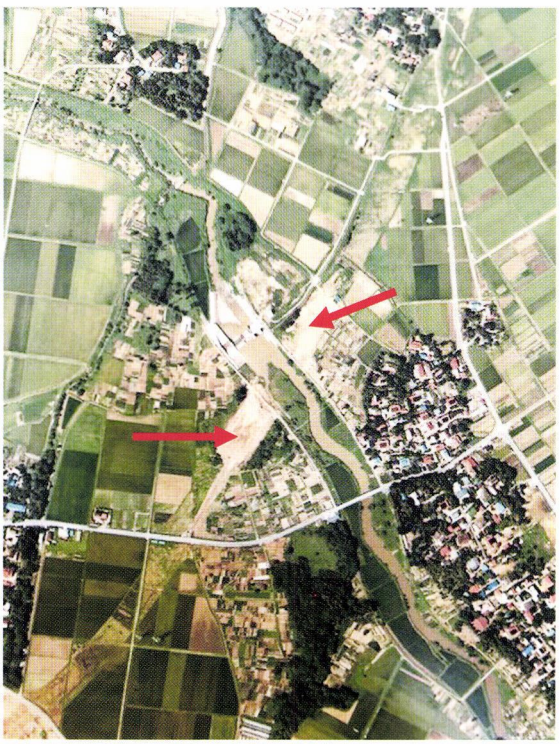
さて、約三〇年前に述べた平野の生成にも触れておこう。

関川右岸の平野の遺跡分布をみると、東南から北西に向かって帯状に遺跡の分布が知られている。これは三〇年に及ぶほ場整備にかかる遺跡発掘調査の成果であって、それに新たな成果が加わったのが下割遺跡の縄文時代の活動跡だ。地下四mという深さも注目されるが、平野の中にポツンと存在するのも腑に落ちない。だとすると、何かの理由で平野の中に周囲よりやや高い丘が生成されていたことになる。そこで思い出されるのが平成町で中島廻り遺跡を発掘した時の地元の方の話だ。一三〇〇年前（奈良時代）の遺跡の下約六〇cmから古墳時代前期（約一七〇〇年前）の遺跡が見つかったことがあった。戸野目川の洪水にしてはおかしいと考えていた私に、地元の方が飯田川の洪水がここまで及んだことがあったと教えてくれた。飯田川は牧区を流れて平野に進出し四辻町付近で急に北へ流れを変え、さらに駒林の南で西へ直角に曲がる不自然な流路の川で、この間に北に直進する左岸に位置するのが下割遺跡だ。この急な流路変更は明らかに人がかかわっており、遺跡付近は自然堤防であったことが容易に推測できる。このような現象は、南東から北西に流れる川が存在していたことを示すもので、自然堤防と湿地帯が関川右岸全体に斜状に連続していた空間を読み取ることができるのだ。

これらを総合すると、関川右岸の湿地帯に関川そのものや支流から多く土砂が運ばれ縄文時代後期（約四〇〇〇年前）までに飯田川によって尾根上の自然堤防が生成され、そこが縄文人の活動の場として利用された。しかし、その活動は長く続かず二〇〇〇年余り後、古墳時代前期に至って稲作適地となった自然堤防にコメ作りを担う集団が多く展開する景観が想像できるのだ。



太型蛤刀石斧（稲作とともに大陸から伝わったとされる石斧）
右 吹上遺跡出土
左 御幸ケ丘出土と推定される



櫛池川で分断されている今池遺跡と下新町遺跡
２遺跡は川の開削で分断されたと考えられている
→今池遺跡　←下新町遺跡

二〇〇〇年の空白―まとめにかえて―

縄文人が平野に進出していた四〇〇〇年前から二〇〇〇年の時間の空白はなぜ生まれたのだろう。古墳時代前期に再度平野に進出した人々の遺跡は、ごく浅いところで見つかることが多いと指摘されてきた。とすると、二〇〇〇年間に平野の北部の大半が陸化したことになる。しかし、それは自然堤防と推測され、完全な陸化とは言えない。五百川氏が述べているように、今こそ一七〇〇年前から度重なる災害経験と多くの人の知恵によって現在の美田が形成されたことを考える必要がある。地下四mの縄文遺跡がそれを語りかけているように思えるのだ。

昭和五二年、富山市から上越市に転じた私は、平野に全く遺跡がないことを知った。もちろん、富山平野にも遺跡など知られていない時代だったので、特段不思議に思ったわけではない。しかし、仕事上市内を回ることが多く、平野に関川で形成された段丘（沖積平野のもの）が広く分布することを感じたことから、新潟県文化行政課の金子拓男係長（当時）に平野の遺跡分布を調査したい旨伝えたところ、氏も同様の見解を示して全市の分布調査を勧めていただいた。とはいえ、現地表の遺物を目視で探して遺跡の存在を推測する方法では限界があり、平野で採集された遺物の大半が古代、もしくは中世のものだった。


平成町で調査された古墳時代の遺構

調査を勧めてしばらくして今池地内で古代の遺物を発見し、金子氏に電話で一報を入れた。その際、「室岡博先生（故人）からパトロール報告が到着したところだ。先生の報告書をもとに建設省（当時）と不時発見の協議を始める」と聞かされた。今池遺跡の発見だ。当時だれも遺跡の存在を予想しなかった、平野の水田の下に大遺跡が眠っていることを知った瞬間だった。昭和五四年のことだ。それ以降、上新バイパス、北陸自動車道、北陸新幹線と平野を貫通する高速交通網に関連する調査が続き、下割遺跡が調査対象となった上沼道に続くのだ。

遺跡は、現代とかけ離れた時代に生きた人々の生活の息吹を伝えてくれる歴史の証人だ。その情報は、発掘調査という手段によってのみ現代に甦る。下割遺跡もそれを雄弁に語りかけていて、水田下に眠る自然堤防のような微高地に四〇〇〇年も前に人が活動していることを教えてくれた。今平野に広がる美田は、弥生時代から二〇〇〇年という長い年月をかけて人々が作り上げてきたものだ。それを知る手段も遺跡である。ぜひ、遺跡の情報に耳を傾けていただき、地域の歴史の息吹を感じていただきたいと願っている。

（元上越市学芸員）

歴史は「今日（きょう）」への手紙

残しておくべきもの 伝えておくべきもの

古絵はがきから見えるもの

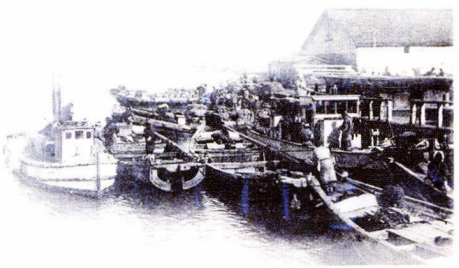


海上ヨリ見タルつたや旅館ト網曳



①（直江津名所）港口

②直江津港口の景（其一）



本誌特集の中箕輪国民学校直江津遭難事件の舞台となった「つたや旅館」の絵はがきは、山崎屋などの旅館よりも比較的多く残っている。そのなかで一番有名なのが、三階建の旅館に鈴なりになった修学旅行の子どもたちが写る絵はがきである。しかし現在残るほとんどの絵はがきは二階建てであり、昭和六年、四二戸が焼失した通称「つたや火事」の後は、二階建てになったと言われているので、それ以降の絵はがきであることが分かる。

写真①は大正七年以降、焼失前までに発行された絵はがきで、珍しい三階建てを見ることが出来る。右の洋風の建物は艀会社である。

海上から地引網の様子を撮影しているが、この絵はがきには二種類あって、撮影位置は同じだが、最近見せていただいたものは、引き上げられている白い網が見え、筆者の手元にあるものは網が見えない。

次の二枚の絵はがきは、関川河口右岸の曳船と艀の光景だが、よく見ると②の曳船の煙突から煙が出ている絵はがきは人物が少ない。①は人物に動きがあることが分かる。二枚のタイトルが違っているので、別の絵はがきシリーズに使われたものと思われる。

同一撮影者であることは想像に難くないのだが、なぜこのようにほぼ同じアングルでありながら、微妙に違う写真を撮影して何種類かの絵はがきを売り出すことになったのだろうか。

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越（かみえちご）後全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

発刊当初の直江津信用金庫は平成十六年一月高田信用金庫と合併、上越信用金庫となった。

あとがき

大型連休が明けた五月八日、新型コロナウイルス感染症法上の位置付けが、季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行となり、アフターコロナに向けて社会の動きに変化が見られ、時に需要が落ち込んだ飲食・旅行業の回復に期待が高まっております。

我が町直江津には、国分寺や居多神社の歴史建造物、水族館「うみがたり」等の魅力的な観光名所や、これからの季節には欠かせない海水浴場もあり、多くの方に楽しんでいただき、直江津の魅力を知っていただけたら良いですね。

そして、何よりも地元の方々が今年から復活する様々な行事に参加され、久しぶりの賑わいを皆で楽しめたら良いですね。（事務局）

目次

海は優しいが恐ろしい。恐ろしいが優しい。 4
◆長野県上伊那郡中箕輪国民學校直江津遭難事件◆
上越出身の世界的建築家 渡邊洋治生誕一〇〇周年記念
「斜めの家」を理解せずに上越の建築文化を語るなかれ 14
頸城の空間を駆ける国府―春日山―府中―直江津へ⑨ 23
地下四メートルの縄文遺跡
―四〇〇〇年前の土地選択― 元上越市学芸員 小島幸雄
歴史は「今日」への手紙 30
古絵はがきから見えるもの
巻頭エッセイ・わたしの直江津
雨の国分寺にて 工藤弘美 2

「直江の津」
第二〇巻二号 通巻五二号
発行日／令和五年七月一日
発行者／上越なおえつ信金倶楽部
発行責任者／小林正夫
問合せ先／上越信用金庫営業統括部
電話 ㈹〇二五（五四三）三一八四
上越市中央一―十一―一
制作協力・北越出版

2023・2号

直江の津

発行／令和五年七月一日■発行者／上越なおえつ信金倶楽部■制作協力／㈲北越出版■表紙基本構成／小谷充■表紙構成／ムロハシデザイン

頒布価格／五五〇円（税込）